

『部落問題解決過程の研究 第5巻年表篇』を読む

大塚 茂樹

ユニークな位置づけの1冊

長年勤務した岩波書店で、『広辞苑』第4版のスタッフを2年半ほど務めていた。初版以降の各版の原本に膨大な付箋が立っていたことを、その折にこの眼で見ている。

『近代日本総合年表』も『世界史年表』も同様であった。もちろん付箋は誤記・誤植ばかりではない。改訂時に検討を要する項目のチェックも大事な仕事だ。読者の指摘で問題を自覚することも多い。

さて部落問題研究所編『部落問題解決過程の研究 第5巻年表篇』について。書名で一目瞭然であるが、本書はユニークな性格を持つ。『部落問題解決過程の研究』全5巻

の中に位置づけられており、他の4巻と連携するので1冊が独立した存在ではない。部落問題や部落解放運動史に限定した年表ではない。1945年8月15日から2000年末までが記述されている。「世界の動き」「政治と経済」「社会と民主主義」「部落問題の解決過程」の4欄で構成されている。

同じく部落問題研究所による『戦後部落問題年表 1945—1976』（増補版・1979年）も忘れてはならない。部落問題のみを記述した年表で、今も存在感を持つ。だが、2006年に研究所の総力を挙げて「部落問題の解決過程に関する研究」にとりくむことを決定した際、旧年表をそのまま継承して新年表にするという問題意識ではなかったという。4欄構成も含めて新たな問題意識で編集し、

10年後に待望の刊行が実現したことになる。

巻頭の広川禎秀氏による解説「年表篇の編集について」がその特長を的確に解説している。各時期の編集方針と旧年表との違いが明確に書かれている。その背景となる問題意識の骨格は、「部落史」では部落問題の解決過程を展望できない。全体史のなかでそれは可能になる。「世界の動き」という欄が必要な理由も、そこから導き出されるといふことである。

興味深い記述が目白押し

さて年表自体の読後感を書きたい。編集者として日本近現代史の書物を担当してきた私は、部落問題への細々とした関心を持続してきたにすぎない。昨年上梓した『原爆にも部落差別にも負けなかつた人びと』がこの主題に関わる唯一の著作で、初学者として学び続けている。

そのような読者にも、きわめて興味深いことが第一の感想である。印象深い個所に付箋を立てると膨大な数になった。随所に未知の事実がある。旧年表にはない項目がきわめて多い。

『京都市民生局資料』を典拠とする項目に、注目すべき

記述が目白押しである。京都を初めとして、各地の行政の動向が詳しく描かれているのは、史料の存在と新たな編集方針が根拠となつている。面白い記述の有無だけでなく、その視点が肝要である。

戦後初期について、広川論考では「行政対運動の図式的視点をとらず」と編集方針が示されている。敗戦・占領に際して支配層が受けた衝撃と新たな対応への目配りが感じられる。とりわけ京都では、GHQの動きに対応して体制側が新たな支配を模索していた。その1つの事例として、朝田善之助氏が市などの手厚い援助で設立された京都製靴株式会社社長に就任しているという注目すべき事実も記している。また敗戦直後の部落解放全国委員会の組織結成についても、朝田氏のみならず北原泰作氏や松本治一郎氏の動向も重視して把握している。

筆者が見つけた興味深い個所は、奈良県に関わっている。下山・三鷹・松川という国鉄に関わる怪事件が発生した1949年夏の「部落問題の解決過程」を見ると、『解放新聞奈良版』8月15日の女性の投書に注目して、「女なんか」「女の奴ら」を口にする男性指導者の意識改革を喚起した内容であることが書かれている。機関紙からこの個所を引用したセンスに敬服した。隣の「社会と民主主義」で

は、8月9日に奈良県二上村の女性5人が大峰山弥山ヶ岳へ登頂したことを紹介し、「女人禁制」に問題提起と記している。奇しくも奈良県内の女性の意識と行動が同時期に記述されている。もちろん前者は部落問題の解決過程に位置づけられ、後者は「民俗」伝承の問題であるから、「属性」は全く異なっている。その上で、戦後初期という時代空間、女たちが突破しようとした壁の厚さを見事に垣間見せているといえよう。

本年表では、全国各地を満遍なく網羅する方針ではない。京都、奈良、大阪、和歌山、長野、群馬に重点を置いて奥行き深い記述をしている。史料や研究状況の反映でもあるが、「部落史」的なアプローチを脱皮しようという意欲はここにも示されている。

第二に、4欄での構成について。先の1949年夏の事例はきらめきを感じさせたが、全体としても成功しているとの感想を持った。広川論考では、新旧年表を比較する典型的な事例として、1953年の妙義・浅間基地反対闘争と1957年の相馬ヶ原(シラード)事件を挙げている。旧年表が「部落解放運動の窓」から米軍基地問題を見ており、今回の年表は部落問題と基地問題の関係を歴史全体の中で見ようとしているとの指摘である。

広川論考で編集方針を確認した後に一読すると、4欄構成に違和感はない。読者は戦後史の全過程に通曉した人ばかりではない。八鹿高校事件のような大事件も、裁判終結までを誰もが正確に記憶している訳ではない。従って「部落問題の解決過程」を他欄と呼応するように位置づける編集方針には説得力がある。その視点は部落解放の捉え方に通底している。

歴史のダイナミズムを捉える

「社会と民主主義」の欄には、部落問題や運動史と関わる事項も多く掲載されている。教育問題も詳細に記され、部落問題以外の多様な人権問題についての事項が選ばれている。女性、公害、在日韓国・朝鮮人、沖縄、ハンセン病問題などの歴史的過程を学び、翻って「部落問題の解決過程」を視野に収めることが可能である。

「政治と経済」は戦後史のダイナミズムの理解を助ける。「世界の動き」は、世界各国での平和と独立、差別と抑圧からの解放を求める運動の高まりを想起させる。4欄を通じて全体史を捉え、そこから部落問題の解決過程を見出し、ていくという編集方針は、部落問題を新たに学ぶ人にとつ

ても有益だろう。

紙幅の制約が最大の難問である。もし20頁増が可能ならば、各地の動向や中心的活動家の軌跡や運動の諸潮流について、より詳述できたに違いない。文化分野も学術研究、ジャーナリズムと同時に、文学やノンフィクションや映画等についてもさらに言及できただろう。

この種の感想は多様な角度から提出できる。ただ増頁と刊行延期の誘惑を克服しなければ、年表や辞典を刊行できない。その厳しさは了解すべきである。また本年表は全分野を等しく詳述する編集方針ではない。たとえば1960年代以降を部落問題の最終的解決への道として位置づけているが、広川論考では同和対策審議会設置と同対策答申、それに続く同和対策事業特別措置法制定と同和対策事業の本格化について、これらを部落解放運動の枠からみる狭さをいかに方法的、実証的に克服するかが決定的な問題であったと述べている。続いて、部落解放同盟の糾弾路線が何をもたらしたか。国民融合をめざす部落解放運動の展開。これらが年表の大いなる山場として登場してくる。疾風怒濤の日々。頁を繰る指にも力がこもってしまう。それらの時期をとらえる課題意識を受けとめながら、深く読みこむことが求められている。

本年表を全面的に活用する。必要があれば旧年表にも依拠し、研究所刊行の歴代の機関誌を参照する。この方法で初学者も多くを学べる。自治体職員、地方議員、教師、ジャーナリスト等は必携。「部落差別解消推進法」との関連で、全国会議員も必読である。

通読した上で、本年表の意義を改めて感受することができた。「部落問題の解決過程」という欄を設定できる年表は部落問題研究所でしか刊行できない。2016年の時点だからこそ、1945年以降を「解決過程」と位置づけることができた。その重みに感慨を持つ高齢世代の方も多いだろう。敗戦時に、部落問題の解決への道を視野に収めることができただろうか。

部落解放運動の現場で苦しみや悲しみを乗り越えながら、歴史を前進させてきた人たちの存在を思う。夥しい付箋を立てる仕事とは異質で、はるかに困難な事業の実現に賭けた人たち。その人たちと思いを共にした研究者の努力が結実した1冊である。年表篇編集委員会の諸氏による多年のご努力に敬意を表して稿を閉じたい。

(おおつか しげき/ノンフィクション作家・元岩波書店編集者)